

6月21日(土)、東京大学本郷キャンパスにおいて4期の木村宰さんを講師として呼びし、「話そう会」を開催した。

「話そう会」とは2004年度に始まった活動である。学部3年生になると、三四郎のメンバーはそれぞれ専門分野に進み、まとまった活動はしづらくなる。それに伴ってメンバー同士が顔を合わせる機会は必然的に減り、環境問題への取り組みでも重視される「多様な考え方・アプローチ」に触れることも減ってしまう。そのような問題意識から、毎回一人を講演者として専門分野の話をしてもらうことで、交流を図ろうと始まったのが「話そう会」だ。

「話そう会」は2004年には8回、2005年には3回開催されているが、2006年以降は行われていない。しかし上記の問題はなお風化していないし、三四郎の歴史が長くなるにつれ、様々な分野で活躍するメンバーが増えてくる。この人材を三四郎の活動に用いないのはもったいない。そのような理由で再開する運びとなった。

今回の講師である木村宰さんは現在、電力中央研究所というシンクタンクに勤務している。そこで地球温暖化防止政策・エネルギー政策についての分析・提言を行っているとのことだ。今年7月は日本で洞爺湖サミットが行われ、地球温暖化は焦点の一つになっていた。社会的な関心も高まる一方、どのような数値目標を設定すべきか、途上国も包摂するような枠組みとはいかなるものかは突き詰めた論議がなされないままだった。ぜひこの機会に専門家のお話を伺いたい、そう思って木村さんにお声をかけた。

当日話し合われた内容としては、一つはシンクタンクという業種の性格が挙げられる。木村さんは「本当に必要な温暖化防止政策とは何か」ということを掲げ、マスメディアよりも問題を深く掘りさげ、大学研究者よりも現実と乖離しない実践的な研究をしているということを感じた。一方で、欧米のシンクタンクと比べると、資金や政治家への影響力という面で見劣りすることは否めないという。

話が地球温暖化について移ると、様々な方向に質問が飛び交った。その中でも特に私が興味を引かれたのは、地球温暖化対策で、京都議定書に代わりうる各国の参加のあり方についてであった。京都議定書の中には「京都メカニズム」というものが含まれ、排出権取引、クリーン開発メカニズム、共同実施を指す<sup>1</sup>。木村さんによれば、この京都メカニズムは全体で定められた排出枠を各国が奪い合う形になっており、米国が離脱したり、途上国を参加させたりできないのは当然だという。

それに代わりうる方法として木村さんが挙げたのが、各国が協同して技術投資・開発を行ってゆくというものだ。その理由としては、省エネルギー化を進めることによって二酸化炭素の排出を削減する余地はまだまだあり、むしろ大規模な技術革新がなければ、大幅な削減を行うのは難しいということがある。また、新たな技

術を適切に共有してゆく形であれば、途上国もその恩恵を受けることができる。エネルギーにかかるコストをいかに抑えるかというのは、先進国に限らず途上国にも関わる問題であるため、全ての国に参加するインセンティブを与えるものとなるわけだ。

このように優れた考えた方は、少なくとも現在のマスメディアでは出てこないだろうと思われた。日本におけるシンクタンクの重要性はもっと強調されてゆくべきではないだろうか。

予定していた2時間はあっという間に過ぎ去ったが、充実した議論がなされたのではないかと思う。と、同時にこのような活動に対する需要は全く失われていないと感じた。今回の反省としては、準備期間が短かったこと、少し固い雰囲気があり敷居が高く感じさせてしまったことがある。それらを活かし、今後この「話そう会」ないしは類似の活動がより蓋然的たりうるよう盛り上げてゆけたらと思う。

<注>

1.<http://www.env.go.jp/earth/cop6/3-4.html>

<参考文献>

杉山大志編，2007，『これが正しい温暖化対策』エネルギーフォーラム．